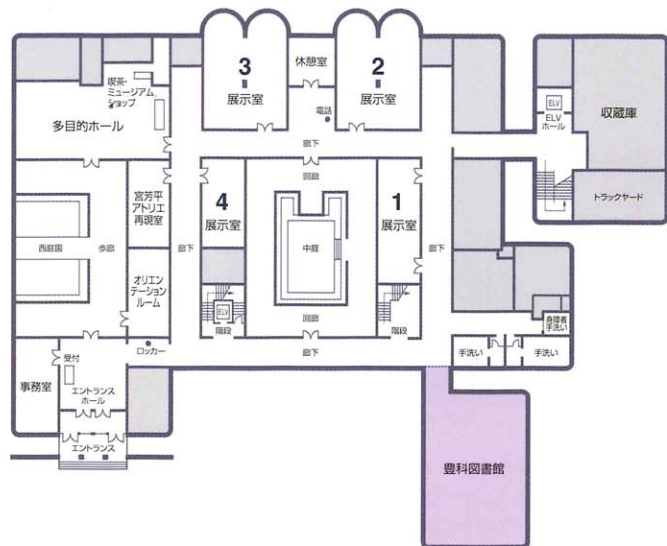


館内平面図

2F 企画展示室



1F 常設展示室



利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 月曜日、および祝祭日の翌日
年末年始 12月28日～1月4日
- 入館料 一般 520円(410円)
大学生・高校生 310円(200円)
()内は20名以上の団体に適用
特別企画展入場料はその都度設定
- 貸館 多目的ホール、展示室を有料で利用できます。
- 入館料の免除について
中学生以下の方
70歳以上の市内在住者
障害者手帳をお持ちの方
- 駐車場 普通車100台

■交通のご案内

JR大糸線豊科駅より徒歩10分/JR篠ノ井線田沢駅から
タクシーで10分/長野自動車道安曇野ICより車で5分

- 新宿からJR中央東線特急あずさで
松本まで約2時間30分
- 名古屋からJR中央西線特急しなの
で松本まで約2時間
- 松本からJR大糸線豊科駅まで約20分
※新宿・名古屋から松本まで高速バス
(約3時間)もあります。

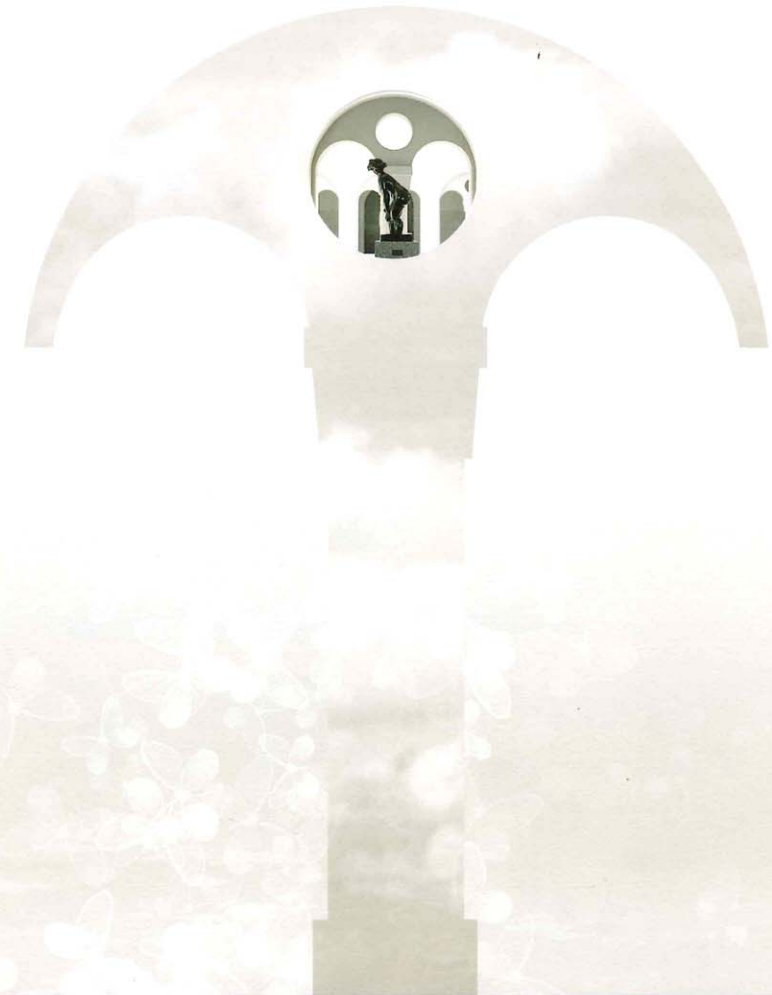


■所在地マップ



Azumino Municipal Museum of Modern Art, TOYOSHINA

Hiroatsu Takata's sculptures
Yoshihei Miya's paintings



安曇野市豊科近代美術館

〒399-8205 長野県安曇野市豊科 5609-3
TEL. 0263-73-5638 FAX. 0263-73-6320
HPアドレス: <http://www.azumino-museum.com>

高田 博厚 彫刻作品・宮 芳平 絵画作品 常設館

↑ 安曇野市豊科近代美術館

西に北アルプス、南東に美ヶ原をのぞむ安曇野の中心部に、豊科近代美術館はあります。当館は、地域文化の向上発展を願って、1992年（平成4年）4月18日に旧豊科町立の美術館として開館しました。その後、2005年（平成17年）10月の合併による安曇野市の誕生とともに安曇野市豊科近代美術館となりました。

建築は、中庭の吹き抜けを、回廊と各室が取り囲む設計で、ヨーロッパの中世修道院の建築スタイルに倣ったユニークなものです。水平線の強調と、太い円柱、天井を支える半円形のアーチは、ロマネスク様式を示しています。1階を常設展示、2階を企画展示などに使用しています。

収蔵作品は、日本の近代彫刻の巨匠、高田博厚の彫刻作品約190点と、森鷗外ゆかりの洋画家、宮芳平の絵画作品約2000点です。これらは、作家が生涯に残した作品のうち、現存するものの大半で、その常設展示は作家の全体像を提示することを目指しています。また、安曇野出身で、信州を代表する洋画家、小林邦のデッサン、スケッチブックなど、約170点も所蔵しています。

企画展では、地域の公立美術館として、独自の視点から近代の美術を幅広く取り上げ紹介し、講演会や音楽会、ワークショップなどの教育普及活動にも力を入れています。

また、約1万坪の広い敷地には、約500種、1000本余りの四季咲きのバラ園をはじめとする庭もあり、四季折々の散策をお楽しみ頂けます。



高田 博厚 高田 博厚 たかた ひろあつ

高田は精神を形づくる本当の芸術家です。彼は指で思索する。

ロマン・ロラン

高田博厚は、1900年（明治33年）石川県七尾市に生まれ、幼年期を福井市で過ごしました。若くして哲学と語学に秀で、18歳で上京、高村光太郎や知識層との交流を深めつつ独学で彫刻を始め、また当時、白樺派に送られたロダンの彫刻《ロダン夫人》に強く打たれました。

1931年（昭和6年）に単身渡仏し、以降26年間をパリで過ごします。この間、ロマン・ロランやアラン、ガンジーなどと親しく交わり、彼らの肖像制作に励みました。これが、ヒューマンズムの思想潮流とあいまって、戦後、高田を一躍有名にすることとなります。

終戦直後は、ドイツで難民になるなど、生死の境をさまよう苦難を経ました。1957年（昭和32年）に帰国し、東京、後に鎌倉にアトリエを構えて制作に励むかわら、執筆活動も盛んに行い、多くの著作を残しました。フランスの精神文化を伝えるこれら文筆は、多くの高田の愛好家を生み、今なお変わらぬ人気を保っています。1987年（昭和62年）鎌倉市にてその生涯を閉じました。

日本の近代彫刻史において、高村光太郎や荻原守衛をロダン受容の第1世代とするなら、高田はそれを引き継いだ第2世代となります。ロダン、ブールデル、マイヨールといった近代彫刻の流れを吸収し、西洋的な人体造形をなしたところに、高田彫刻の特徴があるといえるでしょう。そのことが、高田作品の国際性を保証することにもなっています。

現在、高田博厚の彫刻作品は、日本各地に設置、収蔵されています。当館には、ご遺族、関係者のご厚意を得て、現存する高田彫刻のほぼ大半が収蔵されています。



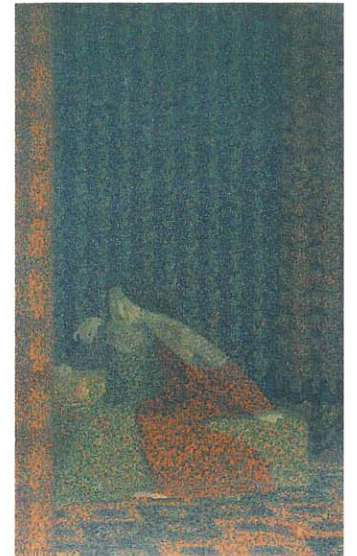
高田博厚（ロマン・ロラン）1961年



高田博厚（ガンジー）1966年



宮芳平（海 その2）1959年



宮芳平（緑）1914年

宮 芳平 宮 芳平 みや よしへい



私の所へ、アカデミイの制服を着た一人の青年が尋ねて来た。……M君はいかにも無邪気で、其の口吻には詞を構へて言ふやうな形迹が少しもなかった。

森鷗外『天龍』より

宮芳平は、1893年（明治26年）新潟県魚沼市堀之内に生まれました。日本海に沈む夕日の美しさに感動して画家となる決意をし、上京後、東京美術学校に入学します。1914年（大正3年）第8回文部省美術展覧会に作品《椿》を出品するも落選。審査主任であった森鷗外を尋ねたのが縁で、以後、知遇を受けるようになります。文豪と画学生との爽やかなこの交流を、鷗外は短編小説『天龍』に著しました。

1915年（大正4年）第9回文展に入選後、日本美術院洋画部にて村山槐多、山崎省三らとともに学びます。その後、新潟県柏崎、神奈川県平塚と移住しつつ、中村彝に師事し、曾宮一念とも生涯にわたる交友を結びます。

1923年（大正12年）諏訪高等女学校（現諏訪二葉高校）に、彫刻家清水多嘉示の後任として赴任し、美術教師として多くの教え子たちに愛されました。戦後は、国画会出展を中心に自己の画境を進め、晩年にはエルサレムなどの聖地を巡礼し、敬虔な祈りのうちに、1971年（昭和46年）京都で生涯を閉じました。

当館にはご遺族よりご寄付いただいた、この作家の生涯にわたる作品を収蔵しています。落ち着いた色調と強烈な厚塗りで描きあげた独自の油彩の世界は、鷗外が若き日のこの画家に「天龍」を見たゆえんを物語るものでしょう。

